

## 第 12 回エコエリアやまがた推進コンクール 最優秀賞（山形県知事賞）

※掲載している情報は平成 29 年度時点のものです。

|        |   |
|--------|---|
| 名 称    | J A 金山酒米研究会                                   |
| 所在地    | 金山町   |
| 応募タイトル | 進化し続ける安全・安心な酒米づくり<br>～「ギャップってナンダジュ？」から始まった挑戦～ |

### 1. 取組の背景・経過等

#### (1) 環境保全型農業、有機農業、販路拡大の取り組み開始年

金山農業協同組合酒米研究会（以下、J A 金山酒米研究会）は、平成 4 年に農家 30 戸（25.8 ha）で発足し、「酒米の里」づくりとして農家・農協・町が一体となって本格的な取組みを行っている。その後、酒米の総合産地を目指し、「出羽燦々」の G A P の認証取得を進めてきた。



#### (2) 動機

近年の消費者のニーズとして、高品質かつ安全であることが強く求められている。そこで、J A 金山では、金山ブランド米の確立と環境保全型農業の推進を重要課題に取り上げ、「信頼される産地」としての契約栽培の強化と、その安定的な生産販売体制づくりに取り組んできた。

そのような中で、酒米「出羽燦々」の契約栽培を行っている立山酒造(株)（富山県）との農商工連携事業を開始し、ケイ酸資材の投入などの土壌改良による低タンパクで高品質な「出羽燦々」を生産してきた。新ブランド及び産地としての更なるランクアップを目指すとともに、全国に先駆けて平成 22 年より「G A P」の認証取得に取り組み始めた。

#### (3) 経営状況

平成 28 年における構成員の状況（規模別・年齢別）および酒米の販売量については、以下のとおり。

#### ◇規模別

(人)

|     | 総数 | ～0.5ha | ～1ha未満 | 1～3ha未満 | 3～5ha未満 | 5ha～ | 1戸平均ha |
|-----|----|--------|--------|---------|---------|------|--------|
| 構成員 | 71 | 1      | 9      | 47      | 5       | 9    | 2.46   |

#### ◇年齢別

(人)

| 性 別 | 男      |     |       |       |     | 女  |     |       |       |     | 計 |    |
|-----|--------|-----|-------|-------|-----|----|-----|-------|-------|-----|---|----|
|     | 年齢別(歳) | ～29 | 30～49 | 50～64 | 65～ | 小計 | ～29 | 30～49 | 50～64 | 65～ |   | 小計 |
| 構成員 |        |     | 7     | 41    | 21  | 69 |     | 1     |       | 1   | 2 | 71 |

#### ◇販売量

| 主要農畜産物、加工品 | 販売量(kg)   |
|------------|-----------|
| 酒米（出羽燦々）   | 878,820   |
| 酒米（美山錦）    | 208,710   |
| 酒米（雪女神）    | 7,440     |
| 計          | 1,094,970 |



#### (4)販路先

J A金山における酒米の流通は、全農及び卸売業者（株式会社アスク）を通じて、立山酒造㈱を始めとした酒蔵・酒造組合等へ出荷している。

#### (5)環境保全型農業直接支払交付金の参加状況

参加なし

#### (6)各種認証の取得状況等(エコファーマー、特別栽培農産物認証、有機 JAS 認証、GAP 等)

GAPの取得状況については以下の通り。

| 年月日          | 取得状況                | 品種/面積        |
|--------------|---------------------|--------------|
| 平成 22 年 10 月 | J G A P 団体認証取得      | 出羽燦々/約 135ha |
| 平成 25 年 1 月  | G G A P 団体認証取得      | 出羽燦々/約 150ha |
| 平成 26 年 3 月  | G G A P 団体認証取得      | 出羽燦々/約 160ha |
| 平成 27 年 2 月  | J G A P 団体認証取得      | 出羽燦々/約 156ha |
| 平成 29 年 3 月  | G G A P 団体認証取得 (予定) |              |
| 平成 29 年 11 月 | J G A P 団体認証取得 (予定) |              |

## 2. 取組内容

### (1)実践している栽培技術や生産工程管理(GAP等)

平成 22 年 (2010 年) より、農業生産工程管理認証制度「GAP」の導入を始め、酒米部門では全国初となる「J G A P (日本 G A P 協会)」を認証取得している。また、平成 25 年 (2013 年) には、米において全国で初めて「G G A P」(GLOBAL GAP) のグループ認証を取得し、「良い農業 (G A P)」による安全で安心な酒米で作った酒が消費者へ届けられている。



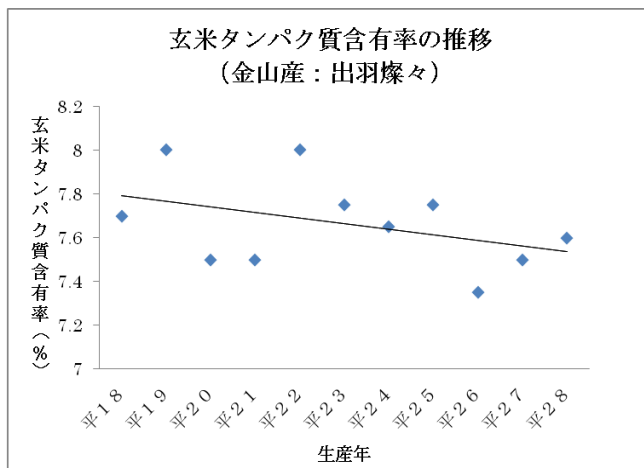
図 GAP米のシールが張られた酒米



図 GAPに基づく農場の点検

J A金山酒米研究会では、適正施肥と適正な農薬使用に努め、環境へ配慮した取組みを推進している。酒米の品質向上の基本は、健全な土づくりときめ細かな対応技術であり、その1つの柱が継続した土づくり肥料の施用とケイ酸資材の施用による稲体の健全化である。酒米生産におけるケイ酸の役割は、①葉身が厚く堅くなることによる光合成の促進 ②根の酸化力の向上 ③倒伏の軽減などである。さらに、穂肥と同時にケイ酸肥料の追肥を行っているのが特徴であり、これには葉・根の活力を高めて光合成を促進し、登熟を向上させ品質・収量を高めるねらいがある。

また、近年の傾向として、芳醇な香りとキレのある酒が好まれていることから、酒米に求められる大きな特徴として、酒の雑味につながるタンパク質の含有量が低いことや、大粒で米の中心に心白があることが挙げられる。そこで、研究会では、酒米玄米のふるい目を県標準の2.0mmから2.1mmへと大きくすることで、整粒歩合を高めタンパク質含有率を低くするなど品質向上を図っている。



※(株)アスク調査データをもとに作成

## (2) 地域や関係者との連携や集団・組織的な活動内容

金山町では、平成8年から平成18年まで町づくりの一環として、「田楽・山楽 in かねやま」という企画を年2回（春・秋）行っており、全国から参加者を募ってきた。その一環として、春には出羽燦々の田植え、秋には稲刈りを体験してもらい、夜には交流会で純米吟醸酒「DEWA33」をふるまうなど、田んぼと酒を結びつけた「酒米の里」づくりに取り組んできた。

また、平成18年より株式会社アスクによる酒米の品質調査と分析が実施されている。この調査では、生産者別にサンプルを取っており、それをまとめた資料は生産者1人ひとりへ配布され、より品質の高い酒米づくりに貢献している。

## (3) 消費者・実需者との関わり、販路拡大の取組み

J A金山酒米研究会では、毎年、生産農家が首都圏の酒屋・小売店などを回り、実際に自分の作った米で造られた酒がどのような形で販売されているかを視察し、交流を行っている。

また、酒造業界の関係者を交えた酒米生産者交流会も行われており、酒米づくりと酒造りの相互理解を深めることによって、酒造りに最適な品質の良い酒米とはどのようなものかを知ることによって、生産農家の意識の向上へつながっている。



図 酒米生産者交流会の様子

## (4) 人材育成活動

酒流通の最前線（関東圏）への研修などを通して、米の生産から酒の醸造、販売にいたる一体的な取組みの意識向上を図っている。

## 3. 成果

### (1) 実践している栽培技術や生産工程管理(GAP等)の成果

品質の分析とそのデータに基づいて、メンバー自らが適正な土づくり肥料の施用・ケイ酸資材の追肥を行っている。これにより、タンパク質含有量が少なく、健全で気象変動に強い稲体を作ることができ、高品質で稔りの良い酒米の生産をもたらしている。

また、会員一丸となってGAP取得を進める中で、農薬の使用を最小限に抑え、肥料を適正に管理・使用するなど、1人ひとりが環境に優しい米作りを目指している。



図 部会のG G A P取得証明書

## **(2) 経営上の効果**

GAP認証米を生産することにより、契約数量に対して、1俵あたり約1,000円の価格上積みが見込まれるなど、金山産ブランド「出羽燦々」としての価値を生み出している。

## **(3) 地域に与えた影響**

消費者・酒小売業者・酒造業者・生産農家・農協・町すべてを巻き込んだ取り組みを行うことによって、「金山町＝酒米の里」としての知名度の向上へとつながった。

## **(4) 人材育成活動の結果**

J A金山酒米研究会は、平成28年時点で71名の会員で構成されており、研修会や圃場巡回等を開催するなどの長年の会員相互の意識づくりにより後継者が育ちつつある。また、会員の中には法人も含まれており、今後高齢化が問題とされる中でも面積を集約していく力があると言える。

## **4. 今後の活動方向**

米余りの時代の中で売れ残らない米づくりを進めていくため、酒米だけでなく品種問わずGAPを取得していく必要がある。また、会員の高齢化に伴い、低コスト・省力化技術を活用しながら、米づくりを進めていくことが今後の課題である。